

B-46 植物染料の灰汁媒染による発色について

秋田大教育 藤枝アイ

目的 秋田県の無形文化財に指定された染織に鹿角茜染・紫根染がある。これはニシコーリ灰汁で、絹織物には50回位媒染を繰返してから染色するものであるが、古くは椿の灰汁を用いたこともあるという。鹿角茜染・紫根染の染め色の美しさと、併せて植物染料の発色を、媒染に用いる灰汁の追求から探ってみる事を目的としてこの実験を試みたものである。

方法 ニシコーリの灰の作り方の公開されていないニシコーリ灰汁を分析し含有金属を検出した。同じく椿・ボクラ・桜・栗の葉を落葉を焚く要領で得た灰も分析した。また椿の採集時期・採集場所の異なる灰汁、及びわら灰・もく灰等で媒染した蘘苳の発色を日本電色K.Kの色差計で、直角座標法によって明度・色相・彩度を求めた。更に分析結果より、化学媒染剤と灰汁媒染剤との発色の相違を、植物染料で染色し比較検討した。

結果 ニシコーリの枝の灰の分析では鉄が検出されたが、無形文化財技術保持者栗山文一郎の作ったニシコーリ灰汁からは鉄が検出されなかった。この事が鹿角茜染・紫根染の色を美しくしている理由の一つであり、その灰汁作りが秘法とされている理由でもある事がわかった。またアルカリ媒染剤である灰汁が、染色に用いる水質は勿論、灰を採る植物の種類、生殖場所、更には灰の作り方によって含有微量金属に相違があり、それが植物染料の発色に微妙な変化を与えている事がわかった。